



日本スピッツクラブ 日本スピッツ標準書

2008年9月23日 改訂
2007年6月17日 改訂
2004年1月25日 改訂
2003年1月26日 制定

日本スピッツは伴侶犬として、次の条項を要件とし、また理想とする。

【概要】

前高姿勢の体構に適度の長さの頸部が小さめの頭部を力強く高く保持するとともに、純白で豊富な被毛は体躯と良く調和し、各飾毛との連繋により姿態美と気品を備え清潔感を表現する。

動作は敏捷で軽快な歩様により、美しい被毛と相乗して長毛種特有の動態美を形成し、優美な容姿を特色づける。

性格は温和の中にも警戒性を失わず、伶俐にして明朗かつ忠実である。

【被毛】

メインコート、フリル、エプロン、ブリーチス等のそれぞれの主体となるオーバコート(topcoat)はやや硬く伸長性に富んだ直毛で、それぞれが長短区分を有し、密生した柔らかな短いアンダーコート(under coat)に支えられ、プリューム(尾飾毛)そしてフェザーの飾毛と連携よく体躯に調和して姿態美を形成する。

また、前肢前腕部、後肢附前部の被毛はスムーズであり、前肢肘関節部から腕球までをフェザーで飾られる。

毛色は純白で冴えた純白がより望ましく、有色毛また巻縮毛、波状毛は好ましくない。ただし、プリュームの微細なウェーブはこの限りではない。

【頭部】

頭蓋は僅かに丸く、体躯との調和・均整のとれた大きさで、過度の丸みは好ましくない。口吻は狐に似た楔型であるが頭部に適応した長さ太さを有し、唇は黒く引き締まっており弛緩または懸垂はしない。

額段は緩やかで額段上部は短毛ながらやや深く、顔面の被毛はスムーズである。

歯は白く強壯で配列は正しく、鋏状が正常咬合である。

【耳】

頭部に調和する大きさを有し力強く頭上に直立する。開き過ぎ(かんざし耳)、寄り過ぎ(クロス)、前傾(角耳)は好ましくない。

【眼】

形状は銀杏の実型又は張りのあるアーモンド型

で、眼縁は黒く虹彩は暗黒色である。丸眼や眼張り不足は気品を損ね、突出眼は本犬種的でない。

【鼻】

丸みをもった鼻鏡は暗黒色で艶があり、大き過ぎ、角張った形状は好ましくない。鼻梁は直であり湾曲はしない。

【頸部】

力強く頭部を保持すると共に、適度の長さで挙揚角度は良好な首抜けを表現し、本犬種的姿態美を形成する。

【背】

髯甲(キ甲)は高く、後方に向かい僅かに傾斜し、短直である。

【腰】

安定し発達し力強く、前駆より高くない。

【胸】

肋骨は強く張り、適度の広さを有し、広過ぎず深い。

【腹】

充実し、後方に向かって適度に緊縮している。なお、生殖器は健全であることを要す。

【四肢】

前肢は真っ直ぐで細めながら強靱で肘はよく締まり、前腕部は僅かに前方に傾斜しているが、前望して双肢平行である。趾の握りは固く、突起した猫趾型で、蹠球は緊握して厚さがあり、暗色が望ましい。

後肢の大腿部は筋肉に富み、膝関節と飛節が屈曲しているが、飛節以下は側望して垂直であり、後望は双肢平行し、趾、蹠ともに前肢部とほぼ同じである。また、前、後肢共双肢間隔は広過ぎず狭すぎない。

【尾】

適度の長さで尾体付け根位置は高く、力強く背中線に背負い、プリュームを美しく開立させる。先端形状は巻尾であるが、付け根付近での極度の巻き過ぎは好ましくない。

【体高、髯甲(キ甲)高さ】

牡は33cm～38cm、牝は30cm～35cmであることが望ましい。

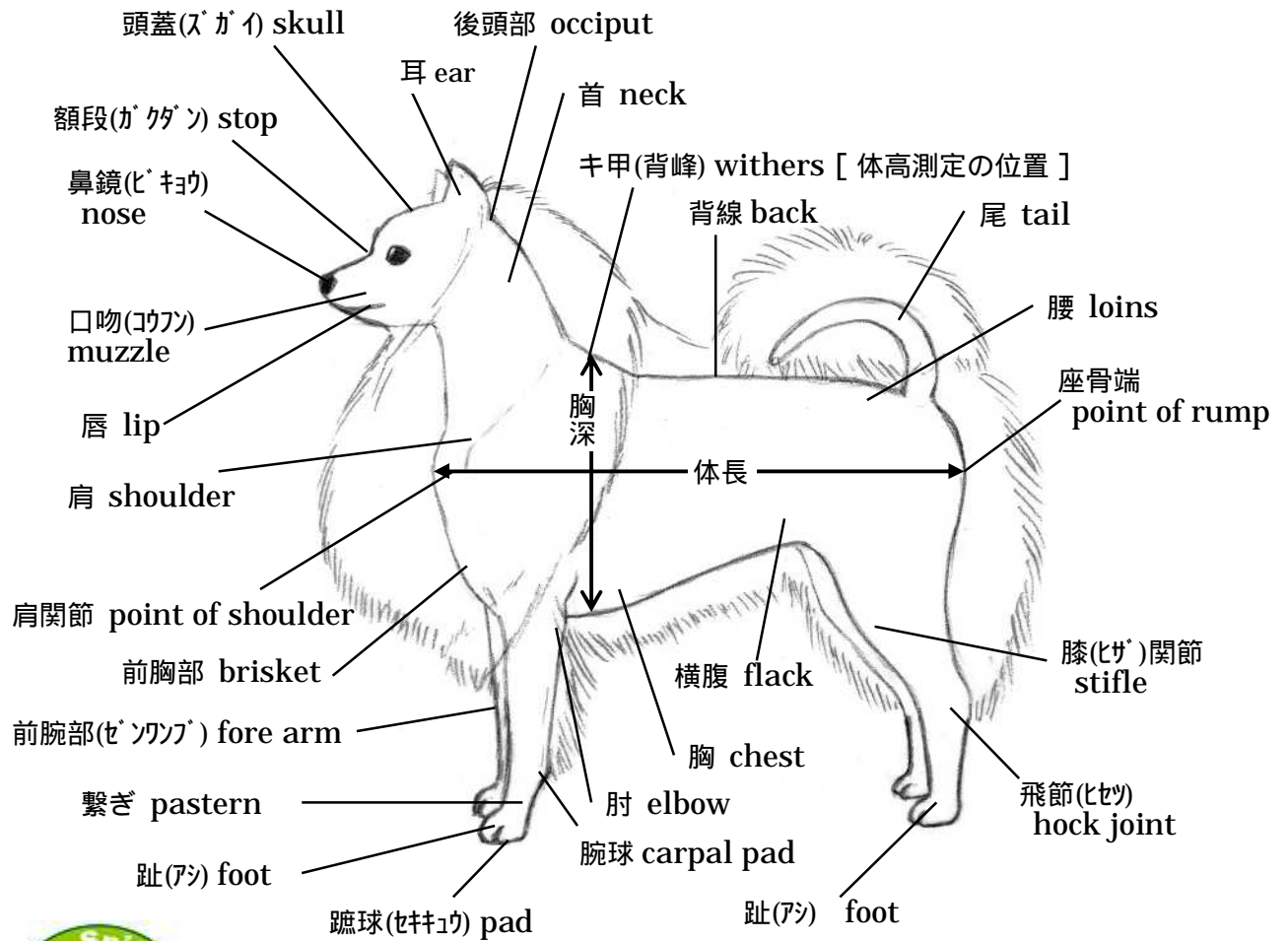
【体長、肩関節から坐骨までの長さ】

側望しては正方形に近い型を推奨する。体高、体長比は、牡 10 対 10.5、牝 10 対 11 を理想とする。

【体重】

牡牝ともに、体高(cm)×0.22～0.23(kg)が良好の状態である。

以上



犬体名称図 [日本スピッツクラブ]



飾毛 (シヨクモウ) [日本スピッツクラブ]

日本スピッツクラブ 日本スピッツ標準書の解説

2008年9月23日 改訂
2004年1月25日 改訂
2003年1月26日

従来、日本スピッツは『愛玩犬を兼ねた家庭警備犬』とされてきました。1959年(昭和34年)にNSAが創立されるとともに、標準体型規則が制定されました。その時代は、戦後の混乱期を通過し14年を経過してはいましたが、当時の治安状況が人々の概念に残り、番犬、つまり『家庭警備犬』としたのは時代背景から頷けますし、犬達の役割がその傾向にあったのも事実でした。

しかし、昨今に至って治安状況は複雑ながらも安定し、セキュリティ機器も普及しておりまして、使役犬用途の犬達まで愛玩傾向で飼育されているのが現状です。勿論彼らの鋭い嗅覚・聴覚によって平常より異なった状況を家族に知らせるといった警備的部分が残されている他、空き巣予防など重要な役割のあることも事実ですが、家族の帰宅、来客等も家人の気付く以前に察知し知らせてくれます。その他、彼等の存在は家庭内融和に必要不可欠な要素を含んでおります。

この様に殆どの犬種が伴侶的な部分を担当するようになり、飼育目的も変わりつつある中であって、日本スピッツは体臭も少なく清潔感に溢れ、容姿、性情などから、コンパニオンドッグとして最も適した犬種であることは言を待ちません。

本犬種の愛玩傾向を持ち合わせた伴侶犬として、備えなければならない形質、理想とする要素を次の各項に示します。

[参考事項]

日本スピッツの犬種種別をユーティリティーグループに組み入れている海外犬種団体もあります。

日本スピッツのFCI番号は、
FCI NO.262/5.5です。

【概要】『純白の豊かな被毛、乾燥度のある四肢、力強く高く保持された頭部、開立(カイリツ)した尾毛』この短い4行で日本スピッツが容易に想

像できます。美しい被毛は体躯と調和して優雅な姿態美を形成し、気品と清潔感が醸し出されて参ります。その中であって、軽快に動き回ることによって日本スピッツ特有の美しさを更に倍加し、他の長毛種の追従を許さない大きな魅力を持っております。

しかし、ここまででは細部形容については言及しておりません。標準書で要求している理想像として、例えば、牡犬は洗練された美男子型、風格のある野武士型、牝犬では可憐な美少女を連想するタイプあり、良き母親となる適母胎型など多様なタイプのある中で、標準書を骨組みとして、『牡は牡らしく、牝は牝らしく』つまり、『性相』を表現することが大切で、他犬種同様に日本スピッツも同一タイプに帰着するのではなく、容貌は他種多様であって然る可きです。

ドッグショーが盛んになるにつれ同一規格化が進み、その影響で遺伝性疾患に悩んでいる犬種もあるようで、日本スピッツも幾つかのタイプの中から理想像に迫り、優秀犬を作出するのが繁殖者が味わえる醍醐味であり、この流れを手助けするのが審査員の責務であります。

性情は犬種特徴として頭脳よく朗らかで快活のなかに、ある程度の警戒心は勿論必要です。

【被毛】背から腰にかけてメインコート、頸部(ケイフ)をフリル、前胸部をエプロン、後肢の大腿部・脛部をブリーチェス(乗馬用半ズボンまたは半袴)で覆い、これらのオーバーコート(topcoat)は直毛で伸長性に富み、柔軟で密生されたアンダーコート(underlayer)に支えられ開立している。しかし、各々の飾毛(シヨクモウ)は長短区分があり、均一毛ではない。肘から腕関節までをフェザーで飾り、テイルフェザーは美しく開立し、各飾毛と連繫(レンケイ)して体躯と調和することにより姿態美が形成される。また前腕部から腕関節・腕前部 繋ぎ、後肢の飛節(ヒセツ)以下の前部はスムーズであって、総ての被毛は

冴えた純白であることが理想であり、純白度不十分、巻縮毛・波状毛はその程度により減点される。但し、テイルフェザー、前肢フェザーの先端には極く細かいウェーブが認められるが欠点ではない。

[前肢腕球(ワキキュウ)以下、後肢附前部と四肢蹠球(セキキュウ)周辺の無駄毛は鋏(ハサミ)を使用し除去することによって、より軽快な立姿、動態を表現できる。]

【頭部】 頭蓋(スガイ)は僅かに丸みをもって体躯との調和の良い大きさと、アップルヘッド(おもちゃの犬の丸い頭)と呼ばれる丸みの強いのは耳が開く原因となるので好ましくない。口吻(コクワン)は狐型をイメージするが細すぎず長すぎない。

太く短く下顎部(カガクワ)の厚過ぎる形状は品位を損ねるものとして推奨出来ない。額段(カクタン)はあまり深くなく穏やかであるが、額段上部は短毛ながら口吻周辺のスムーズな部分よりやや深く、その長さにより額段の深みを強調する場合がある。特に豊毛な牝に多い現象であるが、頭部の均整を損なわない限り欠点とは言えず、全体容姿を引き立たせる役割を担っている場合が多い。唇は黒く、緩んだり垂れ下がってはならない。

歯は強壮であり白く歯列は整って鋏状の正常咬合(コウゴリ)であるが、切端(セツタン)咬合、アンダー・オーバーの不整咬合または歯列不整、欠歯2本以内、4本以内・5本以上、夫々の程度により減点対象となる。

【耳】 頭部に調和する大きさと頭上に直立するが、額の被毛、フリル等の状態により耳の大きさが視覚観察では異なる。この部分は均整を優先する。開きすぎを簪耳(カンザシミ)、前傾を角耳(ツノミ)と言い、大き過ぎや広すぎるのも気品を損ねる。

【眼】 形状は銀杏の実型又は張りのあるアーモンド型で、眼縁は黒く虹彩 iris は暗黒色である。

真鍮(シンチュウ)色は程度により減点対象となる。

また、目張り不足、丸眼、突出眼も本犬種ではない。

【鼻】 鼻鏡(ビキョウ、鼻頭)は艶のある暗黒色で丸みがあり、大きさは眼の約1.5倍を目安として大き過ぎや角張った形状は好ましくなく、鼻梁(ビリウ)は真っ直ぐであり湾曲しているものは減点される。

なお、鼻鏡の色素の微妙な変化は各個体のコンディションに起因されるもので、決定づける欠点とされないまでも、鼻梁の旋毛(センモウ)とともに総合的にはマイナス要因となる。

【頸部】 力強く頭部を保持すると共に、適度の長さで挙揚(キョウヨウ)角度が本犬種の姿態美を形成する一つの要因で、現在までに長過ぎた事例はない。特に牡犬ではフリル、エプロン等の被毛により実際より長さ、角度が低く見える場合が多く、視覚観察では確認することが困難な部分である。他大種でも『首抜け』と称し、重要視するが、本犬種でも姿態美を形成する重要な部分である。

【背】 髯甲(キ甲:withers)の高さの基準は総ての犬種に要求され、骨格構成、運動性能に重要であると共に姿態形成の鍵を握る部分である。その高さは体長、体高比を限りなく箱形に近づけ、前高姿を作り出し、背も短直となる。

【腰】 短直な背線と共に、バランス良く後駆の推進力を前駆に伝える重要な役割を担う。前駆より高くない。

【胸】 肋骨(アハラホネ)は強く張り、幅は適した広さが必要であるが、広過ぎず深くあるべきで、浅いことにより前肢が不自然に長く見える。胸の先端は船底型で歩行をスムーズにしている。また広過ぎることにより前肢の四肢間隔を広くし、歩行性能を抑制するものである。

【腹】 胸の部分から充実し、後方に向かい巻き上がった様に緊縮する。なお、牡成犬の完全潜伏辜丸は失格となるが、片辜丸は減点対象になる。

【四肢】 前肢は側望して前腕部が僅かに前方に傾斜し、腕関節より前繋ぎ (pastern) は更に前傾している。この繋ぎは走行し着地する際の緩衝の役割を果たす極めて重要な部分である。従って長過ぎる弱い繋ぎ、立ち過ぎた短い繋ぎも良好な歩行機能ではない。また、細めながらも上腕部と肘関節は胴体に良く密着し引きつけていなければならない。握りは隆起した猫趾 (ビョウシ) 型で兔趾 (トシ) 型ではなく、蹠球は暗色が望ましい。

なお、双肢は前望して平行で、間隔の広過ぎや狭過ぎは好ましくない。後肢の大腿部は筋肉に富み、膝 (ヒザ) 関節と飛節 (ヒセツ) 部分より前方に屈折 (dog leg) しているが、飛節以下跗前骨は側望して垂直で、後望は双肢平行であり、狭塞 (キョウソク) した間隔、X脚・O脚も運動性能を損ねる。後肢は推進の原動力で、力強い踏ん張りや踏み込みによって得られた強力な推進力は、短直な背骨を伝って前肢で受けとめる。その過程で前関節角度として、肩胛骨 (ケンコウコツ) 角度の大きいほど前肢が前に伸びる。

ゆえに良好な運動性能を得るには、前肢では肩胛関節 $110^{\circ} \sim 112^{\circ}$ 、肘関節 $140^{\circ} \sim 150^{\circ}$ 、腕関節 170° で、後肢関節角度は、股関節 $109^{\circ} \sim 110^{\circ}$ 、膝関節 $120^{\circ} \sim 130^{\circ}$ 、飛節 $150^{\circ} \sim 155^{\circ}$ が良好とされている。

そして、後肢の趾型 (アシガタ)、蹠球の色とも前肢とほぼ同じである。

【尾】 動作や感情の表現など尾の受け持つ役割は、犬達にとっては生活する上に重要な部分を占めている。また、特に本犬種では容姿に大きな影響力を及ぼす。尾体の形状は飾毛のテイルフェザーを美しく開立 (カイリツ) させ、他の飾毛 (シヨクモウ) との調和をより良好な状況に作り

上げる部分でもある。

尾体は薦骨 (センコツ) より背中線に沿って力強く背負う。形状は一本背負い又は自然に捲いて先端が背より下がらないことを理想とする。

過度の巻きにより、尾毛の大半が付け根付近に寄っているのは好ましくないが、テイルフェザーを美しく開立させ姿態美形成に支障のない程度の巻尾は欠点と見なさない。

【体高】 牡は $33\text{cm} \sim 38\text{cm}$ 、牝は $30\text{cm} \sim 35\text{cm}$ であることが望ましい。

【体長】 体高、体長比は、牡 10 対 10.5、牝 10 対 11 を理想としているが、極く希にキ甲の高い個体が理想に届いているのが実状で、殆どが牡 10 対 11、牝 10 対 11.5 が過去における計測結果であった。

【体重】 牡牝ともに、 $0.22 \sim 0.23 \times$ 体高 (cm) [単位: kg] が良好な状態であるが、肥満でない限り母胎としての使命を持つ牝は、やや重い方が良好である。

【補遺】 日本スピッツは長毛種で、密生度と伸張性に富んだ被毛を用件とする。しかし、被毛の状態により外貌は微妙に変化し、フルコート時には前肢が短く、頸部 (ケイブ) の挙揚 (キョウウ) が低く視覚観察では軽快性を欠くこととなるが、採点には動態も含め体躯とのバランスを優先する。

